

25時行動委員会・富山

# 通信 10

2015.12.

25時行動委員会・富山

(090-7744-0122 藤岡)

E-mail:25h.action@gmail.com

Url:http://25h-action.blogspot.jp/

2015.11.29 〈25時行動委員会〉  
——「プロジェクト・〈ピープル〉の創り方」序 (続)

トークセッション：

第0回；「〈ピープル〉が生まれ・・・ ???」 その4

柿木伸之：「歓待と応答からの共生 第四章 ポストコロニア  
ルな共生へ向けた歴史的責任」（「パット剥ギトツテシマッタ後  
の世界へ」（インパクト出版会2015） P194-P202）を読む

敗戦後70年——この列島に生きてきた私・たちとは何者なのか。何を  
尋ね、どこへ生=行こうとしているのか。

私・たちは、敗戦70年のこの夏、「列島共和社会住民」に成り変わる  
路を遠くまで行きたいと想った。そうして、秋の終わりを迎え、あらた  
めて私・たちのはるかな遠い道行きに、想いを馳せ胸をふるわせている。

しかしながら、今回は、私・たちの目と耳を鍛えあうレッスン1のよ  
うなものなのかもしれない、とも思う。それでもやはり、自分たちにと  
っては貴重な場であり大切にしていきたいと思う。

以下は、柿木さんの文章を手がかりにして行ったトークセッションの  
流れと発言を、大まかに追ったものです。

● 9月に行ったワークショップでは、私は、柿木さんの文章にとっても心ひかれました。「記憶を分有する民衆を、来たるべき東洋平和へ向けて創造する」（「図書新聞」2015年8月8日号）—— このタイトルを想っただけでひろびろとした気持ちになりました。

ところが、あれほど読みたいと思っていた柿木さんの文章を読んで、最初に感じたのはとても強い違和感でした。読んでいて、凄く苦しくなってきたのです。そんな自分に、今日は付き合ってもらおうことになりそうです。どうか、よろしくお願いします。

はじめに、柿木さんの文章の中で、強い違和感を感じたところを出していきます。

「ポストコロニアルであることは、現在も続く植民地主義の歴史を中断させた先に、支配と被支配の関係ではない他者との共生の未来として考えられる一方で、この未来が歴史的責任にもとづいてのみ追求されうることも忘れられてはならない。」

(P195)

「ポストコロニアルな世界を目指すとは、暴力の歴史を踏まえながら、そこで他者に行使された暴力を再び繰り返さないことであり、他者との共生を目指す者にはその責務が課せられるのだ。」(P195)

「「ポストコロニアル」という語の「ポスト」という接頭辞は他方で、植民地主義が押し進められていく過程で取り返しのつかない暴力行為がなされてしまった後に、その歴史を踏まえて引き受けられるべき責任を指し示すものであり、「ポストコロニアル」という語を用いるとは、植民地主義の暴力を乗り越える責任を担う立場を表明することなのである。」(P196)

「自分がそのなかに生きている植民地主義の歴史に由来する責任を引き受けることによってこそ、ポストコロニアルな他者との共生を、自分自身の可能性として追求することができるはずである。」(P196)

「とりわけ私を含めて現在「日本人」として生きている者が植民地主義の克服をめざそうとするとき、かつて日本がアジアの他の国々に対して行った植民地支配と侵略戦争を記憶し、その暴力を再び繰り返さない責任を、他者に対する自分自身の応答可能性として引き受ける必要がある。」(P196)

「自分を問いただす他者の声に応えて初めて、これまでの不信を越えて他者と出会い直すことができるのではないだろうか。」(P197)

「他者に応答する可能性として考えうる「日本人」の責任は、とくに直接的な加害の罪責を負っていない者が引き受けるべき「戦後責任」として考察されるべきだろう」(P197)

「アジアの他の国々の人々を実際に殺し、傷つけた人々、あるいはそのような暴力に当時荷担した「日本人」たちは、直接的な加害の責任を問われなければならないし、それによって処罰の対象となるはずの人々も数多くいるが、敗戦後に生まれた「日本人」が、そうした直接的加害の罪責としての戦争責任を負っているわけではない。

だからといって直接的な加害者の末裔として生きている、いわゆる「戦後生まれ」の者が、日本の植民地主義の歴史に由来する責任と無縁であることは決してありえない。むしろ直接的な加害の罪を負っていない者こそが引き受けうる戦後責任が、植民地主義的な暴力の克服へ向けて、今問われているのだ。その責任を否認することは、他者からの呼びかけに対して耳を塞ぎながら、植民地主義の歴史がこれからも続き、他者を排除する暴力が繰り返されていくのに荷担することではない。」

(P197))

- 「責務が課せられる」とか、「責任を担う立場を表明すること」とか「～すべきだ」とかいう言い方は、自分には強すぎて素直に受けとれなかったのです。

それに、こんなにすっきりと、はっきりと言い切ってしまうといいのかな、とも思いました。もっといろんなことが複雑に絡み合っていることのような気がする。そのところの違和感のようなものもあったのです。

ここで、柿木さんが「直接的な加害の罪を負っていない者こそが引き受けるべき戦後責任」といつていることにつながっているようなことを、辺見庸という人が「1★9★3★7」(金曜日)に書かれていたので、〈引用〉します。

「わたしが想起したくなくても想起するかぎりにおいて、父の歴史とわたしの歴史は交叉せざるをえないのだ。ひとが歴史を生きるとはどういうことなのだろうか。歴史的時間を生きるとは。それは、ニッポンジンでも朝鮮人でも韓国人でも、自己の生身を時間という苦痛にさらし、ひるがえって、時間という苦痛にさらされた他者の痛みを想像することではないか。わたしの記憶と父の記憶は、傷んだ筏のように繋留されたままである。からだに時間の痛みとたわみを感じつつ、自他の「身体史」を生きること——それが歴史を生きることなのか。」(辺見 P240)

「南京における殺・掠・姦は、わたしが犯したことはない。だが、だからといっ

て、それらにわたしはいかなるかかわりもないということが出来るだろうか。わたしは他者の記憶にいつさいのかかわりがないと断言できるだろうか。わからない。よくわからないのだが、わたしは他者の記憶を知りたい、聞きたいとねがう。そうおもふことじたい他者の記憶と舐うことなのではないだろうか。」(辺見 P87)

- ここまでのところで、みなさんどう思いますか。
- 「柿木さんの文章に対する強い違和感」というのが、僕にはわからない。僕は全く違う読み方をしているので、どうしてそんな風に思うのかが、理解できない。僕は、全く違った読み方をしたんだよね。いま言われていることを、僕は全部否定したい。どうしてそんなふうにするのかが、わからない。
- 私は、柿木さんははっきりと言ってくれているから、逆にわかりやすかった。自分にとってどうしたらいいかわからないという部分は、もちろん残るけれど、柿木さんが言っていることは、その通りだなってすごく思いました。
- 僕も、柿木さんの文章は全然違和感なくすーっと入ってきて、とても喚起されて読みました。
- 僕は、前回の「図書新聞」に書かれていた文章と、今回の文章との「距離」を感じた。別人が書いているような気がした。同じ柿木さんなんだけれど。
- 「図書新聞」では、憲法九条はアジアの人たちに向かってひらかれたものだから、そのことをどう共有していくか、ということとかもっといろんなことにひろがって書かれていたと思う。

僕も、最初、柿木さんの文体のところでひっかかった。柿木さんの文体が「~すべきだ」というトーンでずっと書かれているから、それがすごくひっかかってしまった。柿木さんは、この一定のトーンの中で、おだやかに、しかしきっちり、ポストコロニアルな共生へ向けての責任を果たすよう、読むものに迫ってくる。最初は、その「決意」を求める求め方が、単調でしつこいように感じた。

でもよく読んでみたら、柿木さんは、自分でここに書くことをきちんと整理するために、ぐっと絞って腰を据えているんだな、と思えてきた。

この本の中で、柿木さんは「ヒロシマ」ということに、すごくこだわって書いている。広島という地域がもってきた歴史、それこそ「他者」のいっぱい集まったところの「ヒロシマ」を可能性として考えたい、だからこそ可能性があるんだ、という熱い想いがすごく伝わってくる。

だけど、この「第四章」に関しては、そういうことに極力ふれないで、「他者」という言い方をずっとしている。最初読んだとき、僕は「他者」という言葉にひっかかってしまった。

辺見庸の書いていることは、「週刊金曜日」に連載されていたとき、本屋で立ち読みして

拾い読みしていただけないのでよくわかっていないけれども、まるごとの肉体というか身体  
というか、具体的な一人ひとりの死、一人ひとりのことをちゃんと見ろよ、と迫ってくる  
ものを感じる。自分は見たいんだと、そこにもものすごくこだわっているのだと思う。

そういう意味で、あえて「他者」ということをきちっと置くことだ、というのが柿木さ  
んのスタンスだと感じた。

- 「他者」という語り方は、論の展開の仕方が「一人称」なんだと思う。

自分もポストコロニアルということを簡単に言えない立場だからこそ、「現在も続く植民  
地主義の歴史を中断させ」なければいけないと言っている。現在自体が、植民地主義を肯  
定したものとして流れている時間だからこそ、その中でそれを問題にすることはできない。  
だから、あえて「中断させ」たところで考えないといけないと言っているんだと思う。

柿木さんの文章は、「一人称」に忠実であろうとした文体なのだと思う。それを「三人称」  
の文体でやってしまうわけにはいかないから、こういう文体でやらざるを得なかった。そ  
ういうきつところを通してあえて書く、ということをしざるを得なかったのだろう。そ  
れだけ自分にとっても重い課題だから。柿木さんにしても、この「第四章」を書くのはき  
つかったんじゃないかな。「あなたがポストコロニアルという言葉を一言口にすることが、  
もうあなたは、脱植民地化に進むものとして、これから自分は行動しますということを宣  
言するようなことなんだよ」って、そこまで読んだ人は脅迫される。これを読んだら、す  
でにもうそういう風にあなたは生きなければならないって、この人から強制される。それ  
以外の在り方で、ポストコロニアルという言葉をお口にすな、と。

- 私が感じていたのは、柿木さんからそんな風に強制されることに対する反発だったのか  
な。

柿木さんは、この本のなかで、「ベンヤミンは、すでに物語られて支配的になっている歴  
史の覆いを剥がして、その歴史から消された死者たちの記憶を甦らせる、すなわち「歴史  
を逆撫でする」道を指し示している。(P14)」と書かれている。死者の沈黙と向き合うこ  
と——「未だ歴史となっていない記憶を呼び起こし、死者とともに生きる場を今ここに切  
り開くものへ歴史そのものを反転させること (P4)」が必要だということは、私もわかる  
ような気がします。けれども、「[「ヒロシマ」を想起することは、死者の嘆きを、さらには  
怨みさえも自分のなかに反響させながら、みずから「剥ぎとられた世界の人間」になると  
ころから始まるのではないだろうか。(P2)」と書かれていることには、すごく違和感があ  
る。柿木さんの言葉を、「パット剥ギトツテシマッタ」という、皮膚が蒸発した死者の言葉  
として受けとるには、いったい柿木さんはどこに立っているのだろうか？柿木さんの文章  
に戻ります。

「植民地支配と侵略戦争の暴力を二度と繰り返さない責任である。」(P198)

「このような戦後責任を、「日本人」の責任を問う声に応じて引き受けること」  
(P198)

「その戦後責任の在り処を、真に「戦後」にあると言える他者との関係へ向けて」  
(P198)

「証言できない死者たちに対する責任にもとづく自身の唯一性において、生き残りの一人ひとりはその記憶を語る。しかし、そうして代替不可能な立場において証言を行なうのは、未だに正義が実現されていないばかりか、死者たちをも脅かす暴力が今も止んでいないからでもある。」(P199)

「暴力の記憶の証言に応答するとはまず、証人のなかでけっして過ぎ去ることのない出来事に向き合うことなのだ。それは、証言される記憶を、定型化された言い回しのうちに回収したり、あるいはそうすることで既成のひと続きの物語のなかに解消したりすることではけっしてありえない。証言を聴き届けるとはむしろ、それらを徹底的に解体して、自分の歴史認識を根本的に刷新することなのだ。」(P199)

「元「従軍慰安婦」のような日本の植民地主義の下での暴力の被害者の証言に応じて、それが証す出来事を記憶するとは、その出来事の記憶から日本の植民地主義の歴史を捉え返すことであり、暴力の記憶の証言を聴き届けようとする者は、まずその責任を引き受けなければならないのである。」(P200)

- 「二度と繰り返さない責任」とあるけれど、私はどうしてもこんなふうには言えないな、と思いました。それで、次のような〈引用〉をもってきました。

「・・・服従という非〈暴力〉は、無関心という非〈暴力〉とともに、反逆的〈暴力〉よりも、はるかに暴力的で犯罪的である・・・とわたしは年来おもっている。辺野古におけるあからさまな国家暴力をまえにして、見て見ぬふりをするホンド民衆の非〈暴力〉は、沖縄に対するホンドの圧倒的かつあまりにも理不尽な〈暴力〉の行使にひとしいことは言うまでもない。」(辺見庸ブログ 2015/11/12)

「安倍晋三なるナラズモノは、いったいなにから生まれ、なににささえられ、戦争法案はなぜいともかたんに可決されたのか。「この驚くべき事態」は、じつは、な

んとなくそうなってしまうのではない。ひとびとは歴史（「つぎつぎになりゆくいきほひ」）にずるずると押され、引きずりまわされ、悪政にむりやり組みこまれてしまったかにみえて、じっさいには、その局面局面で、権力や権威に目がくらみ、多数者やつよいものにおりあいをつけ、おべんちゃらをいい、弱いものをおしのけ、あるいは高踏を気どったり、周りを付度したりして、いま、ここで、ぜひにもなすべき行動と発言をひかえ、知らずにはすませられないはずのものを知らずにすませ、けっきょく、ナラズモノ政治がはびこるこんにちがきてしまったのだが、それはこんにちのようになってしまったのでなく、わたし（たち）がずるずるとこんにちを「つくった」というべきではないのか。」

（辺見庸「1★9★3★7」（金曜日）P374）

「脱植民地化の安易な試みは、もう一つのナルシズム、つまり今度こそはナルシズムの構図から逃れ、対象そのものに自分は向き合っているという誤った確信を生む。植民地化から脱するのではなく、みずからが植民地化のうちにあることを自覚し、むしろそれを推し進めるしかたでそれを内側から対象化すること、そうした屈折した道行きのみが、植民地主義の罨をкаろうじて穏和なものにすることができると思われる。」（古賀徹「理性の暴力」（青灯社）P368）

- そして、やっぱり私は違和感があります。あまりにも「責任」という単語がいっぱい出てきすぎだと思う。古賀さんという人は、こんなことも言っています。みなさん、どう思いますか。

「そもそも圧倒的な破壊によって作られた途方もない傷口に対して、それに釣り合う言葉も行為もあり得ないであろう。ブラックホールが無限の物質を吸収して何も残さぬように、いかなる応答も無力であろう。レスポンスの連鎖を通じて傷を修復することは不可能であり、傷ついた存在をその連鎖を通じて世界にもう一度繋ぎ止め、引き戻すことも不可能であろう。そういう意味で責任とはそもそも不可能なものなのである。」（古賀・同上 P200）

「責任が「何かについての責任」となるとき、その「何か」と、それに対する「応答」としての補完とのあいだには、一つの有意味な連関が成立しなければならない。だが、その有意味な応答、まともな応答とは、じつは純粋な責任状態を無理矢理制限したものなのである。……（中略）……いわゆる、何々にきちんと責任を取るという世間的には正当で有意味なレスポンス（理想的なコミュニケーション）関係が、実は究極的な責任の否定、その制限によってはじめて成り立っていることに

気づくだろう。正当な責任の取り方として被害の救済ということが主張されるのなら、そうした救済は実は救済の否定、その不可能を示しているのである。だとしても責任はとらなければならない、それを形にしなければならない。そのとき責任の遂行形態としての謝罪なり補償なりは、それ自身が謝罪ではありえず、補償でもありえないというある種の欠け目、負債を伴ったものとなるだろう。」

(古賀・同上 P221-222)

「対象の「魂」を感じることができるのは、対象に対する無限な、しかも不可能な応答の努力が為されてはじめてのことなのである。対象に対する無限責任の彼方にはじめて対象の魂を感じることができる。」(古賀・同上 P204)

- なぜ、そんなに「責任」と言うことに違和感があるのか、僕にはわからない。僕は、柿木さんが言うことに素直にそうだな、と思えるよ。「責任」と言わないなら、他にどんな言葉があるのかな。僕は、「責任」として引き受けざるをえないと思う。たくさんのことを果たすためには、たくさんのことをしなければ果たせない。だから、何度も何度も「責任」と言うしかないのだと思う。
- 「責任」とは、その呼びかけに対する「応答可能性」にほかならない。(レヴィナス) (柿木 P217) とあるけれど、いまの古賀さんの〈引用〉は、「応答可能性」ということについて言われているように思います。
- 「応答」というのは、相手の声に応えること。どうしたら応えたことになるのかは、関係性の中でしか言えないことなんじゃないかな。
- 「責任」という言葉でしか言えないことなただけけれども、その「責任」という言葉が、本当にそのものに対する「応答」にはならないことを踏まえても、なお、「責任」と言うしかないから「責任」と言っているのではないかな。  
例えば「補償」したり「謝罪」したりすることが、その埋め合わせになることでは全くない。つりあいのとれるものではないということを古賀さんは言っていて、その通りには違いない。でも、「戦後補償」とか「戦後責任」とかいう風にしか、僕らは言葉を持っていない。その言葉が本当に「してしまった行為」に対する埋め合わせみたいなことになるはずがない。それでも、その言葉しかない、ということなんじゃないかな。
- 私たちの共通の言葉が本当でない、ということなんだね。私・たちは、いま言葉の〈不在〉と真に向き合っている。素手で手さぐりでつかんでいくしかないんだよね。柿木さんは、この「第四章」を書きながら、ものすごく苦しかったんだろうね。ようやく私も、そう思えてきました。また柿木さんの文章に戻ります。



「かつて「従軍慰安婦」にされた女性たちの証言のなかから発せられている責任の問いかけと正義への呼びかけは、まずは「日本人」へ向けられている。もし証言の聴き手が「日本人」であるならば、問いの宛て先としての「日本人」であることを他者の前でいったん引き受けて、その責任を問う声に耳を澄まさなければならない。」  
(P200)

「「日本人」でない者の前で「日本人」であることを引き受けながら、「日本人」のアイデンティティの拠り所ともなっている歴史を、証言される出来事の側から総体として問いただすという記憶の責任を負ったうえで、「日本人」の聴き手に何よりもまず求められるのは、植民地主義者としての「日本人」であることをみずから乗り越えて、植民地主義の暴力を繰り返さない責任をみずからに課すことである。」  
(P201)

「「日本人」であることを内側から突き破りながら、そのような責任を引き受けること」(P201)

「元「従軍慰安婦」の証言に接した「日本人」の聴き手が、性奴隷制度の暴力の直接の加害者ではないならば、そのことを明らかにしたうえで、未だ実現されていない正義、この来たるべき正義へ向かう立場を表明すること、これが「日本人」として問いかけられた者の歴史的責任を、他者との共生へ向けて引き受けることにほかならない。」(P201)

「こうして加害の罪責としての戦争責任から区別される戦後責任を、真の「戦後」へ向けて引き受けることは、性奴隷制度の暴力をはじめ植民地主義の暴力の隠蔽が「日本人」の国民的共同性を形成しているとするならば、それを打ち破ってこの共同性そのものを問いただし、神話的虚構としての「同胞」とではなく、自分に呼びかけ、問いかけてくる他者、そのようなあり方で現にそこに存在する他者と共に生きることを選ぶことである。」(P201)

● ここに、「正義」という言葉が出てくる。

僕は、ここにすごく違和感を感じました。

確かに、元「従軍慰安婦」の人たちの「正義」はとりもどさなければいけないし、圧倒的に不「正義」の立場に置かれてきて、今でも不「正義」の立場に置かれていることに対する想いというのは、よくわかるのだけれども、そういう意味で「未だ実現されていない正義」とはそういうことなのかなと思う。

でも、「この来たるべき正義へ向かう立場を表明する」というのは、自分たちの側、証言を聴く側のことを言っていると思う。自分たちの側のことを言うときに、なぜ「正義」という言葉を使わないといけないのか。

確かに被害者としての「他者」は、あまりにもひどい不当な扱いを受け、彼女らにとっての「正義」を奪い返す必要がある。しかし、そのことを問われる側が「正義」という語を持つことは、どうなのだろうか。それは当然負うべき責任であって、それ以上の意味を付加すべきではないのではなかろうか、と僕は思う。

- 私も、「この来たるべき正義へ向かう立場を表明すること」というところに、すごく違和感を感じました。思わず、「これは絶対に違うだろ！」とメモしていました。
- 僕は、「違和感を感じる」ということがよくわからない。僕らは「直接的な加害者の末裔」だから、「正義」という言葉を使っちゃいけないということことなのかな。
- 「他者」の側の「正義」に自分も立つんだ、という文脈としてはわかる。でも、そういう言葉をあえてなぜ使うのかがわからない。
- 柿木さんという人は、すごく大きな時間の幅を往復している人だと思います。「死者」と未だ来たらざる者をつないだ歴史的時間の中での、「来るべき正義」というところがポイントだと思います。歴史的時間の中を生きている自分たちにとって、「救済」といったことは何であるのか。そのようなすごく大きな時間の幅の中で出てきている言葉のように感じます。そのような意味で、短い文章に凝縮した彼の言葉のひとつひとつに反発しても、しょうがない。この人のもつ大きな思想の幅の中で受け取れば、僕は、違和感は全然感じないと思います。
- ここで、夏頃からよく言っていた酒井直樹という人の言葉を、あらためて少し紹介します。

「人間」「民族」そして「日本人」の中で、閉ざされた共感は、日本人以外の人びとに対する徹底した無視、無責任の上で成り立っている。

犯され、傷つけられ、辱められた人びとへの驚くべき鈍感さ。

国民の感傷的な自己憐憫の中に閉じていくもの。

馴れ合いの共同性としての国民的統合に、非国民の眼差しや普遍的な価値を持ち込むこと。

「ひきこもりの国民主義」と名づけた精神構造——過去の高度成長と残存した帝国意識という「良き時代」の幻想に、仲間と「ひきこもう」と「内」だけに通用する幻想にふける。これに協調・同調しないものは、排除していく——は、「外」の国際関係には通用しないのである。

「自己憐憫の共同体」としての「ひきこもりの国民主義」の「外部」に出ること。

「外部の他者」との、不可侵・不戦条約締結が必要」

「ポスト」は「ポスト・ファクトゥム」であって、それは「後の祭り」という意味での、「取り替えしがない」あるいは回復不能な事態に於ける「ポスト」である。・・・(中略)・・・植民地主義の歴史は日本人という同一性に「とりかえしがない」仕方で刻印されており、ひとが日本人であることの中に植民地主義者であったことが本質的に含まれてしまっており、それは、日本人という同一性を構成するかけがえのない歴史であって、この植民地主義の歴史の現存こそが、ポストコロニアルなのである。」 (酒井直樹「日本／映像／米国——共感の共同体と帝國的国民主義」(青土社) P294～P295)

「もし、「日本人」という国民が、共感によって(つまり共犯によって)統合された集団であるなら、私はそのような日本人である必要はない。・・・(中略)・・・日本人の内実を大きく変えて行くためには、日本人を統合するどころか、日本人の即時的な共同性に分裂を持ち込むことが必要なはずだ。それは日本の国民主体に干渉し、その日本人の統合の幻想に干渉することである。」(酒井・同上 P301)

「違った関係を人々と打ち立て、同一性から逸脱できる社会的空間が切り開かれるはずだからである。歴史的責任に応答することを通じて、私たちは一歩ずつしかし着実に、「日本人」「白人」あるいは「西洋人」であることを止めることを目論もう。歴史的責任は「在日非日本人」「変な白人」あるいは「西洋人のなり損ない」への通路であり、」(酒井・同上 P304)

● もうひとつ、心に残っている言葉があります。

「現在あるような私たち、なぜなってしまったのか。どのような歴史的来歴が、たとえば、日本人という頑固な主体性をつくりあげてしまい、私たちの行動を決定し、私たちの感性を制約してきたのか。これまで共生することができなかった人びとと、いかに新しい社会関係をつくってゆけるか。新しい友人と出会うためには、私たちの何が変わらなければならないのか。」

● これは、ある人が書いていたことです。

「歴史認識を変えろとは、国民的アイデンティティを構築する上でかかせないナショナリズムに基づく歴史意識を否定し、植民地支配の負の歴史を直視することによって、人々が「国民意識」に支配される歴史観を拒否すること」

僕は、「人々が「国民意識」に支配される歴史観を拒否すること」はできるのかな、と思います。「国民意識」に支配されない歴史観というものは、もちうるのか。もちたいと思うし、それを東アジアの民衆と共有することは可能か、ということを行っているのだと思い

ます。

僕にとっては、驚くべき言葉だったんです。すごい言葉だと思ったのです。

- 仲里効さんが、どこかで「日本という国民国家の枠組みの臨界で、沖縄の可能性を立ち上げ、アジアにむかってひらいていく思考実験」だと書かれていました。

〈実験的な精神をもっていること・外部へひらくこと・路上で語り合うこと・言葉をつくること＝〈空間〉の創出〉の大きな大きな魅力が、湊千尋「革命のつくり方」にいつまっていた。

私・たちの身の内深くには、遠い〈過去〉からの、集団の記憶が、群衆の記憶が、〈街頭〉の記憶が遠く呼び醒まされる日を待っている。そんな気がしています。だから私・たちは、もっともっと足腰を、身体を、鍛えなくてははいけない。そして「時空を結び、そこに抵抗を通い合わせる」——仲里さんのこの言葉には、私・たちの希望があると思います。

それと、辺見庸さんが、「現代詩手帖」(2015. 11月号)で、「〈なぜニッポンなのか〉がわからない。……クニに裏切られ同胞に見すてられ歴史に背かれても、ニッポンという小さな内面に執着する。……ニッポンという形を内側で一所懸命に崩壊させないでいる。……ニッポンという内面がどうしても去ってくれない。抜けてくれない。逆にどこまでもつきまとう磁場や毒性みたいなもの。そういったものを感じるんだよ、自分にもね。」と言っていました。ふたたび辺見庸という人のことばを〈引用〉したいと思います。

「(1994年の1月に、ソウルの日本大使館まえで割腹自殺をしようとして未遂に終わった三人の元「慰安婦」を韓国で追跡取材して、)……この人たちの体内深くに巣くう「日本」とはいったいなんだったのか。何年たっても、殺そうとしても消えない、病巣のような「日本」とはなんだ。」(辺見庸「1★9★3★7」 P245)

「もしも、この世に、じじつというものがあるとする。……(中略)……じじつは、仮に唯一無二であるにしても、それは無限の多層・多面体であるに違いない。無限の多層鏡面をかすかに滑る光と影の終わらないつらなりを、どの角度から、どのような悲しみと絶望とおどろきのまなざしで見つめつづけるのか」(辺見・同上 P219)

「鉛灰色のヴォイド(超空間)は時間をかけてもっともっとひろがっていくのではないのでしょうか。世界の外面だけではなく、ひとの内面の超空洞化が戦争のたびごとに、そして外面だけの平和のたびごとに、いまも深まっているのではないのでしょうか。それはファシズムよりももっと怖い価値の全的な空無化ではないのでしょうか。……」(辺見・同上 P327)

「まだなにも済んではいないのである。未了である。終われないのだ。」(辺見・同上 P340)

「未来は、まだ過去のなかでわだかまっているのだ。大いなる恥として。」  
(辺見・同上 P381)

## 「8. 黒い屍体と赤い屍体

キラキラノ破片ヤ  
灰白色ノ燃エガラガ  
ヒロビロトシタ パノラマノヨウニ  
アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキミヨウナリズム  
スベテアッタコトカ アリエタコトナノカ  
パット剥ギトツテシマッタ アトノセカイ

(原民喜「夏の花」1947年)

原民喜は、原爆が投下されたげんばについて「精密巧緻な方法で実現された新地獄に違いなく、ここではすべて人間的なものは抹殺され、たとえば屍体の表情にしたところで、何か模型的な機械的なものに置換えられているのであった。苦悶の一瞬足搔いて硬直したらしい肢体は一種の妖しいリズムを含んでいる」と書き、「バスを待つ行列の死骸は立ったまま、前の人の上に爪を立てて死んでいた」といった情景を、あくまで静かに描写して、げんじつが「超現実派の画の世界」になりうることに目をみはった。そして天皇ヒロヒトは後年「原子爆弾が投下されたことに対しては遺憾には思ってますが、こういう戦争中であることですから、どうも、広島市民に対しては気の毒であるが、やむを得ないことと私は思ってます」といいはなった。これにより、人倫の基本中の基本が、天皇じしんによりおかされた。万象を支配している理法のいっさいをくつがえすほどの、これは冷酷無比の言いぐさだった。クニじゅう上を下へのおおさわぎになっていいはずの非人道的発言であった。けれども、おきるべきことは、なにもおきなかった。くりかえす。なにもおきず、なにもおこさなかったのである。この「おことば」はすべての道理を殺した。ことばを殺した。時間を消しさった。ひとびとは「おことば」を、「アッタコトカ アリエタコトナノカ」と、わが耳をうたがいながらも、なんとなく受容してしまうことにより、このクニにあってはいかなる言説もけっきょくなんの意味もなさないのではないか、と感じたはずである。いいかえれば、ひとびとは「おことば」を受けいれる

ことによってニッポンの言説の無効化に手をかしたのである。いかなる観点からも、このクニは民主主義国家ではありえないのだ、いまだに。

「アッタコトカ アリエタコトナノカ」の光景はまだある。画家の香月泰男（1911～74年）はかつて「1945」と題する不気味な画を描いた。画面いっぱい、顔をはじめからだじゅうに無数の線条をはしらせた男が横だおしになっている。香月が『私のシベリヤ』で（同著のゴーストライターだった）立花隆にかたつたところによれば、それは「満人たちの私刑を受けた日本人にちがいない」という。香月が敗戦後、中国からシベリアに送られるさい、「奉天」（遼寧省瀋陽の旧名）のあたりで車中からみた屍体だった。「皇軍」とニッポンジンは南京だけでなく中国東北部でも恨みをかけていた。「衣服を剥ぎとられた上、皮を剥がれていたらしい。（……）赤い絵具でボディペインティングでもしたかのように、たて縞模様が全身に走っていた。それは確かに、解剖学の教科書にのっている、人間の筋肉を示す図そのままだった」。香月はヒロシマの屍体を無辜の民の被害を象徴する「黒い屍体」（じっさいには「赤い」それもあったのだが）とよび、線路脇にみた生皮をはがされたニッポンジンの「赤い屍体」に、加害者の死を象徴させる。香月はかたる。「赤い屍体の責任は誰がどうとればよいのか」「戦争の本質への深い洞察も、真の反戦運動も、黒い屍体からではなく、赤い屍体から生まれ出なければならぬ」。だがしかし、よくよくかんがえてみれば、「黒い屍体」の責任も「赤い屍体」の責任も、被害の責任も加害の責任も、敗戦後70年、まだだれもとってはいいない。つごうのわるい時間はかつてよりぶあつく塗りつぶされたままである。

「黒い屍体」も「赤い屍体」も、1<sup>イ</sup>★9<sup>ク</sup>★3<sup>ミ</sup>★7<sup>ナ</sup>の狂乱と有頂天のなかではまったく想像だにされなかった。想像も予感もぜったいに不可能だった、というべきではない。だれも歴史の行方を、自由な意思でだいたんにおもいえがこうとしなかったのだ。ために、ひとびとは予想だにしない歴史にいつぺんにこえられてしまった。過去にこそ未来のイメージがある。「パット剥ギトツテシマッタ アトノセカイ」が、未来に先行して、いまやってくることもありうる。それがいまふたたび、かつてよりもはるかに大きなスケールでやってこないとだれが断言できるだろうか。過去の跽音に耳をすまさなければならぬ。あの忍び足に耳をすませ！ げんざいが過去においぬかれ、未来に過去がやってくるかもしれない。」（辺見・同上 P376～379）

- 僕は、辺見庸さんの「黒い屍体と赤い屍体」は、ショックでした。そういうあり方があったんだ、ということ徹底的に「記憶」しよう、「記憶」ということをきちんと据えることが大事なんだと思う。その人の丸ごとの生、生の軌跡のようなものを、きちんと意識しなきゃいけないんだ、と思いました。
- 相手をただ殺すだけではない。・・・常軌を逸したすさまじい殺し合いがあった。たま

りにたまった憎しみが、いかに深かったか・・・・。

とうとつかかもしれませんが、おとといの北陸中日新聞（2015.11.27）に、こんなメッセージが載っていました。

## レリスさんのメッセージ全訳

### 「君たちに憎しみをあたえない」

「金曜日の夜、君たちはかけがえのない人の命を奪い去った。私の最愛の妻、そして息子の母を。でも、私は君たちに憎しみを与えない。君たちが誰かも知らないし、知りたくもない。君たちは死んだ魂だ。君たちは神の名で無分別に殺りくを行った。もし、その神がわれわれ人間を自らの姿に似せてつくったのだとしたら、妻の体に撃ち込まれた一つ一つの弾丸が、神の心に撃ち込まれていることだろう。

だから、私は決して、君たちに憎しみという贈り物を贈らない。君たちはそれを望むだろうが、怒りで応えることは、君たちと同じ無知に屈することになってしまう。君たちは、私が恐怖し、周囲の人を疑いのまなざしで見つめ、安全のために自由を犠牲にすることを望んだ。だが、君たちの負けだ。私はまだ、私のままだ。

今朝、（亡きがらの）妻に直面した。幾晩も幾日も待ち続けた末に。彼女は金曜日の夜に会った時と変わらず美しく、そして、恋に落ちた12年以上前と同様に美しかった。もちろん、私は悲しみにうちひしがれている。だから、君たちのわずかな勝利を認めよう。でも、それは長くは続かない。彼女は、いつも私たちと一緒に歩む。そして、君たちが決して行き着くことができない天国の高みで、私たちは再び出会うだろう。

私と息子は2人になった。でも私たちは世界のいかなる軍隊よりも強いんだ。私が君たちに費やす時間はもうない。昼寝から目覚めた（息子の）メルビルと会わなくてはならない。まだ17ヶ月の彼は毎日、おやつを食べ、私たちはいつものように遊ぶ。この幼い子の人生が幸せで、自由であることが君たちを辱めるだろう。君たちは彼の憎しみを受け取ることは決してないのだから。」

（パリの「テロ事件」で妻を亡くしたフランス人ジャーナリスト、アントワーヌ・レリスさん）

- 私は、柿木さんの「第四章」を読んで、自分がずっと強い違和感から抜け出せなかったのはなぜだろう。そんな想いのなかで、柿木さんの本書をパラパラめくっているうちに、柿木さんは、私たちにすっきりとたくさんのことを指し示してくれていることに、びっくりしたんです。

そのことを、最後にいくつか紹介したいと思います。

「この歴史的責任をみずから担うとき、それを問いかける他者の特異性を肯定すると同時に、これまで引き受けてきた国民的アイデンティティーとともに、それを可能にしてきた歴史を問いただし、それを乗り越えようとしているのだ。」(柿木 P212)

「日本人」として生きている者は、その問いかけの声に応えるところからのみ、「ポストコロニアル」な他者との共生への道筋を、アジアの他の国々の人びととのあいだに切り開きうるのではないか。」(柿木 P197)

「日本の植民地主義の歴史における加害行為を、自分のアイデンティティーの根幹にかかわる問題として記憶し、」(柿木 P198)

「場合によっては敵でもありうる、自分とはどこまでも異質な他者を、異質なままに受け容れ、そのような他者と共に生きることを「平和」として再考するべきであり、その出発点にあるのが他者の、まさに「他者」としての歓待にほかならない。だからこそデリダは、他者が「何らかの仕方で『迎え入れられた』ことにならなくては、平和を語ることに意味はない」と述べているのである。・・・(中略)・・・他者「と平和でいる」こととしての「平和」は、つねに新たに築かれなければならない。」(柿木 P214)

「遭遇した他者を選ぶことなく肯定するところから、その他者と「平和のうちに」生きる関係を具体的に築く道を、一人ひとりの生を置き去りにしがちな政治を解体しながら探るとき、平和の概念が、他者とともに生きることのうちに取り戻されるにちがいない。」(柿木 P174)

「「共棲」ないし調和的「共生」の観念は、それぞれ異質であるはずの者たちを「自然」の名の下で同質化したうえで、「共棲」および「共生」を閉鎖系の安定として思い描くことによって、結局は「異物」の排除を正当化してしまうのだから。だが、他者とはまさにこの「異物」でもありうる者のことではないか。そして、そのように異質な者と共に生きることを抜きにして「共生」を語ることに意味があるのだろうか。」(柿木 P180)

「他者にまさに「他者」として出会い直すところからこそ開かれるはずだ。」(柿木 P181)



「他者との共生の場として地球の表面を見つめ直し、そこで実際に共に生きていく余地を切り開くこと」（柿木 P186）

「これまで「国民」のアイデンティティを背負うことによって、それぞれ特異な他者の存在を否認し、排除してきたとすれば、そのとき同時に自分が根源的に他者に開かれていることをも否定してきたのではないだろうか。」（柿木 P203）

「『国民』のようなアイデンティティの枠を越えて他者と出会い直す」（柿木 P202）

「自分自身も、自分や自分たちだけの「わが家」や「国」を失って、異国の客となることでもある。・・・（中略）・・・自分が生きている場所が他者と分有すべき共生の場であることを、実際に再発見することに他ならない。」（柿木 P208）

「『われわれ』という「同じもの」たちのための「安全」を振りかざすことは、他者を排除し、人種の彼方に遺棄する暴力が「戦争」という剥き出しの姿で世界に浸透していくのに荷担することにもなりかねない。もしかすると、自分たちの「安全」を振りかざすことによって、自分の心までも、根拠なき恐怖によって戦争状態にしているのではないだろうか。」（柿木 P214）

「朝鮮人であることを自覚して朝鮮人として生きるとは、一者ではなく多者であろうとすること、つまり意思をもって「多数」を生きることである。・・・（中略）・・・『多数とは、〈死者と共に在る〉という人間存在の基本にもとづいた思想であり、目には見えないけれども、消えたわけではけっしてないものを表現する意志である』（ちえ じんそく 崔 真碩）』（柿木 P163）

「歓待と応答にもとづいて他者と共に生きるとは、他者「と平和でいる」ことにほかならず、・・・（中略）・・・この暴力の歴史の彼方を、「平和」として希望することにほかならない。」（柿木 P215）

「時空の隔たった惨禍の記憶が、残傷の分有によって応え合うなかに形成される記憶の星座、それは、人間性のすべてを剥奪しながら人を無残な死に追いやり、死者の記憶をも抹殺しようとした暴力の残余からの想起にもとづいて語られるもう一つの歴史、残余からの歴史を描き出すものと言えよう。この残余からの歴史を描く星座の閃きは、忘却と暴力の歴史が続く現在を照らしながら、死者とともに生きるこ

とに踏みとどまる、抵抗としての生の可能性を指し示すだろう。」(柿木 P246)

「現在の世界にあって、死者とともに生きることには踏みとどまることである。このことの内実をみずから考えなければならない。」(柿木 P232)

- 柿木さんはp 214で「根拠なき恐怖によって戦争状態にしているのではないだろうか。」と言っているけど、僕は、この「恐怖」には根拠があるんじゃないかと思う。

たとえば、「戦争責任」を負っていないとか、あるいは「第三世界の人々の搾取の上に、自分たちは生を享受しているのではないか」とか、そういう自分たちの存在の仕方の不正義感みたいなものが、ある種の恐怖になってるんじゃないかな、っていう気がします。

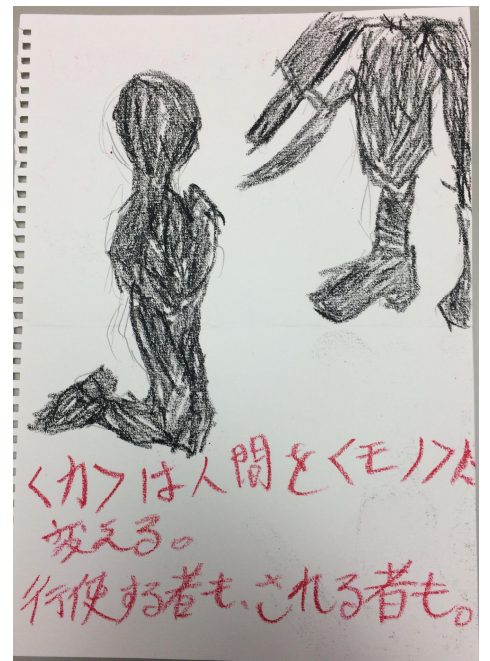
植民地主義の蔓延というか、植民地支配の折り重なった状態というものが現在ある。その上に自分たちの生が成り立っていると思ったら、「責任をとる」ということは永久責任であって、それはできないということだけでも、そういうことにきちっと「責任をとる」ということをしない限りは、そういう「恐怖」から逃げられない面があると、僕は思っているのです。

- 僕は、柿木さんの文章を読んで、「力は人間をモノに変える。力を行使する者も行使される者も」(フランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユ)というフレーズを、思い浮かべたのです。

力は人間をモノに変える——人を殺すということは、その瞬間まで生きていた人間を屍体というものに変えてしまうこと。そういうあり方だけではなくて、生きたまま魂を殺す。そういうあり方もありますよね。力を行使する側とされる側の、モノになるなり方は違うと思うんですけど、行使する側も、魂が殺されているんだ。そんなことを思いました。

柿木さんの、ここまで倫理的な情熱。柿木さんが、私・たちにつきつけてくる動機づけというのが、僕はよくわからないんです。「責任を引き受ける」とか、「他者に応答しなければならない」とか、あまりにも大変な要求をつきつけられているので。

- 柿木さんは、すごく大きなテーマをきちんと言おうとしている。〈ヒロシマ〉ということについて、真剣に迫ろうとしている人だと思う。いま、〈ヒロシマ〉を問題にすることはどういうことなのかを、つねに考えようとしている。そのことをきちんと踏まえて書こうと思うと、こういう文体になってしまったのではと思う。自分に課している、という姿勢のようなものを感じました。



どうやって、自分たちがポストコロニアルということを引き受けていくかというときに、いろんな哲学者の人たちが解こうとしていたことを、どう使うのかということ、その使い方について、ものすごく苦心して書いているんだろうなと、思えてきました。

そんな柿木さんの〈苦心〉を、こういう形にしてみせてくれた。そういう意味で、「他者」の記憶を、いかにして「戦後」を生きる者が共有し、「他者」との〈共生空間〉をともに切りひらいていくのか、という大きなテーマは、何度でもそこに立ち戻ってソウゾウ力をめぐらすべき「起点」とでもいえるものではないか。そういう「起点」を創ろうとして書かれたものだと僕は思いたい。

「他者」というのは、たしかにいろんな「他者」を想定することができるはずで、「他者」と、どういう「応答」をするかということこそ問われていると思う。「応答」を求める〈声〉は、つねに自分たちに届いていると、僕は思っています。僕は、きちんと「応答」することが必要だと思うし、応えていく責任は自分にあると思っています。その責任を果たしていくあり方を、どういうふうにと共有していけるか、そのためにどのような〈表現〉を創りだせるかということ。

「他者」というのは、いろんな形で考えられるし、考えられるよということ、今日柿木さんは言ってくれたような気がする。

「従軍慰安婦」とされた人たち、70年前の戦争のことについてだけではなくて、それを自分たちで考えていく。でも、そのときにベースになっているのは、「戦争責任」、「戦後責任」のことがきちんと果たされていない。そこはつねに「起点」としてあるぞ、と。そこをきちんと考えた上での「他者」なんだ、と思います。

先ほどでいた「シリア難民」の問題についても、まさに「他者」！ どういうふうを受けとめたらいいのか。日本という国は、その人たちを受け入れていないというけれども、じゃ、自分はその人たちの〈声〉に、どう「応答」できるか。そのことは、ほかの「他者」ともつながってゆくことだと思う。

柿木さんは、どうしたらアジアの人たちとの新しい〈共生空間〉というものを考えられるだろうかと、必死になって考えていると思う。そういうことについて、自分たちもこれから踏み込んでいくんだ、と思いたい。

- 私が柿木さんの文章から最初に感じた強い違和感は、柿木さんの言葉を受けとめる私の側の受けとめ方にあったことに、ようやく気づきました。きっと、「共生」とか「責任」とか「時間」とか「記憶」という言葉には、自分が感じている以上にもっともっと重層的で歴史性のようなものがいっぱい詰まっているんだと思う。それらの言葉をスイングさせていく、運動させていくことは、自分たちがすることなんだなって、私はやっと気づいた気がします。

ある人が、「侵略戦争は、日本人自身を含めた、『人間』という総体を修復不可能なほど

に裏切り、毀損したという体験」なのだと言っていた。私・たち「日本人」は、決して忘れてはならない惨禍を引き起こした「国民」であるからこそ、私・たち日本の民衆が果たさなければならない責任というものが、あるはずだと思う。私は、その道行きの始まりにつきたいと、とても思っています。

- 僕は、柿木という人は、アジア侵略戦争がアジアの人びとに与えてきたものをきちんと受けとめながら、そこでおびただしい非業の死を遂げた人たちと、いかにその記憶をわかち合っていくのかという、そういう回路をつくっていくことで「国家を超える」、そういう〈民衆〉が生まれる必要があるのだ、と言っていると思う。

## 〈トークセッション〉を終えて

歴史認識というのは、記憶の問題である。侵略戦争および植民地支配で、当事者にならざるをえなかった人びとの記憶、死者の記憶を、いかに後からくる者たちが共有できるか。共有できる回路が、アジアに平和をもたらす回路になるだろう。それが、自分たちが言っている「21世紀の安保闘争」の柱になるのだ、と確信している。

記憶というものをどうとらえ、それを本当に共有できるのかということが、自分たちに問われている。私・たちの胸に通奏低音のように響いているのは、「敗者の世界をめざす——敗者の世界をめざすとは、未だ終わっていないとつぶやくこと、敗者の屍の上に築かれた世界を、その屍の上にあるということだけを根拠にくり返しくり返し、変革することを、敗者という存在の廃絶に至るまで求め続けること」という〈声〉だ。——私・たちは、遠くまで行かなければならない。